名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第9号
2004年10月1日

「神さま！」とつぶやくこと

尾上　明子

よくご存知の童話の王様・アンデルセン(1805－75)は、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの名前通り、クリスチャンとして生きた人でした。彼は母親が亡くなったとき、次のような詩を捧げています。

私の母に

おさな児のたよりない身を
あなたは母の手に抱いて
わたしの唇に〈神さま〉と
つぶやくことを教えてくれました
わたしはあなたの胸から
いのちと愛情をすい
あなたはわたしに主のみ
心を知ることを教えました
（略）
わたしは知っています
お母さん、神が何をわたしに与えてくださったかを
そしてわたしのすべての幸運は
ひとえにあなたのおかげなのです
なぜならわたしの大きな幸運に
わたしは値しないのですから
（略）

私にとってアンデルセンはいつの間にかとても身近な存在になっていました。それは、彼の生涯や作品、人となりを知るようになってからのことです。

アンデルセンにとって神さまは、日常のなかにいつもともにいてくださる神さまでした。14歳で母親のもとを離れ、コペンハーゲンに着いたとき、彼はまず港で祈りました。この大都会のなかでたったひとり、どのようにして生きていけばよいか、彼は2週間くらいの生活費しか持っていませんでしたから。彼は多くの困難のなかで大変な努力をしました。そして、少しずつ周りの人々から援助の手が差し伸べられるようになります。また、彼は生涯のなかで大きな失恋を何回かしているのですが、その度に傷心癒旅行をしています。そこから多くの文学作品（詩・小説・紀行文・戯曲・オペラなど）が生み出されました。そのひとつが童話でした。アンデルセンは、靴職人の息子に生まれ、階級制の厳しかった時代に多くの人々から愛され名声を得た人です。自伝のはじめに「私の生涯は波乱に富んだ幸せな一生であった。それはさながら一遍の美しいメルヘンである」と書いてあるとおりです。しかしその出発は、この詩のように、「神さま！」とつぶやくことを教えた母親の祈りだと言います。

私にとってもそれは同じです。「神さま！」とつぶやくことを教えてくれた人たちに今更ながら感謝をしているのです。

田浦前学長最終講話

3月15日

「創造的出会い」

去る2004年3月をもって退任された田浦武雄前学長は、3月15日の本学チャペルにおける卒業・終了・修業礼拝で最終講話を行われました。

人生は出会いの旅路であると言うことができます。誰でもそれぞれの人生においては、いくつかの出会いがあると思います。しかし真の出会いは単に人と人との触れ合いではなく、その人の人生観や物の考え方を大きくゆさぶったり、変えたりする重要な出来事であります。信仰や人格の成長という観点から見ますと、出会いの質が問題となります。真の出会いは建設的で創造的なものでなくてはなりません。

「出会い」という語が思想的に有名になったのは、イスラエルの哲学者マルチン・ブーバー（1878－1965）の著書『我と汝』（1923年）によってであります。人間関係は「我とそれ」というような、他者を自己の欲求の手段視していくのではなくて、神との出会いを基礎にした「我と汝」の人格的呼応関係を保つことの重要性を、彼は強調しています。

聖書には出会いとみられる実存的経験の記録は、多くのところにみられます。その中でも典型的なものは、漁夫であったペテロが仕事をなげうって、キリストに従った決断の記事（マタイによる福音書4：18－20）、ダマスコ途上におけるパウロの回心の記事（使徒言行録9：1－9）であります。

これらのペテロやパウロの例に示されるように、出会いは、人が意図的に誰かと会うという行為ではなくて、むしろ偶然的に訪れるものであります。しかし偶然的に会っても、それによって精神革命というか人生観の改革が行われなければ、出会いとはいえません。しかも出会いの質が重要であります。例えばAという人がBという人に出会い、Aは人生観の変革を経験したが、Bという人はサリンをまいて殺人をすることをよしとする人であり、Aもそれに従ったというような場合、それは真の創造的出会いとは言えません。

次に特にパウロにふれたいと思います。パウロはペテロと違って、キリストに直接師事したわけではなく、むしろキリスト教には批判的でありました。しかし33歳くらいの頃、キリストとの出会いによって精神革命を行い、神による召命を感じ伝道に献身し、キリスト教をユダヤ教のナザレ派から世界宗教へと広げていく働きをしました。この間、経済的な貧苦に会ったり、反社会的な行動の名目で何度も投獄され、不自由な生活を余儀なくされました。しかし彼は決して挫けることはありませんでした。その理由はいかなる困難にあっても、生き抜く強さを神から与えられているという信仰を持っていたからです。私たちは神の召しに応えたパウロの生きざまや「愛によって互いに仕えなさい」(ガラテヤの信徒への手紙5:13）というパウロの教えから多くのことを学ぶことが大切です。

次に私のささやかな出会いの体験から、二つほどあげてみましょう。一つは原爆体験に関係しています。1945年8月6日の広島への原爆につづいて、8月9日に長崎に原爆が投下され、広島で14万人、長崎で7万人の市民が亡くなりました。被害の大きさの違いは、原爆が広島では平野に、長崎では山あいに落ちたためと思われます。長崎に原爆が投下された時、私は爆心地から20キロくらい離れた村にいましたが、爆弾の破裂音と爆風とは、今だに記憶に残っています。三日位してから長崎の家を訪ねてみましたが、家は原爆にともなう火事で焼失していました。街は一面広い焼野原となっており、大きなショックを受けました。8月15日には終戦の大詔が発せられ、戦争は終わりました。原子爆弾による多くの人命

の喪失と廃墟との出会いによって、私の人生観・世界観は大きく揺さぶられました。これからは偏狭な愛国心に支えられた国家主義に流されず、世界平和と人類の共生のビジョンを持つことが大切であると思いました。

次に日本のハンセン病治療に召命を感じて献身した宮崎松記氏（1900－1972）との出会いについて述べます。私が旧制五高（現在の熊本大学）の三年生の頃（1943年）でした。夏の一夜、五高ＹＭＣＡの数人と一緒に、熊本市郊外にあったハンセン病療養所菊池恵楓園内の同氏宅に招かれた時の話の中で、「人は何かを奉仕するために生きているのです」という宮崎博士の言葉に、同氏の深い体験がこめられていると思って感動したことがあります。同氏の一生はまさしくキリスト教信仰に根ざしたものでありました。この信仰を強めたのは、同氏の青年時代におけるハンナ・リデル女史との出会いによることを、同氏の著書『ぼだい樹の木陰で』（1969年）で知ることができました。リデルさんは34歳（1889年）の頃、英国の伝道団体から日本に派遣された方ですが、ハンセン病院を開設し患者の療養に献身している姿に、宮崎氏は感動して、ハンセン病の治療に奉仕する志をたてたのでした。創造的な出会いを通しての人格形成や召命の自覚の大切さを学びたいと思います。

水曜日の礼拝講話から

「道がなければ切り拓けばいい」

5月12日

墨　さおり

私は７年前に保育科を卒業し、３年前に保育専攻を修了しました。そして今年の12月より、青年海外協力隊としてパキスタンの幼稚園に行くことが決まりました。私にとっては念願の青年海外協力隊であり、海外で保育の仕事に携わりたいという夢への一歩をようやく踏み出すことができました。

青年海外協力隊に入りたいと思ったきっかけは、高校卒業を間近に控えたある日に見たＴＶ番組でした。その番組では、アフリカで幼稚園の先生をする日本人女性が出ていました。子どもたちはそんな彼女を慕い、彼女も子どもたちを愛している。そんな姿に憧れを持ちながらも、幼稚園の先生は国境だって越えられるんだと羨ましくも思いました。しかしどうしたら彼女の様に働けるようになれるのだろうと思った時、ＴＶの中の彼女が青年海外協力隊を経てアフリカの幼稚園で先生をしているということを聞きました。単純な私は「よし！青年海外協力隊に入ってそれを足がかりにして海外で幼稚園の先生をするぞ!!」と心に決めました。

保育科に入り、２年生になった時両親に自分の進みたい道を打ち明けると、真っ向から反対されました。協力隊で派遣されるのは、発展途上国と言われる地域や国であり、治安も必ずしも良いわけではないからです。そんなことから、一度は諦めておとなしく就活をしました。就活も思うように行かず、ようやく８園目にして受かった幼稚園もわずか２年で辞めることになりました。子どもたちに教えられたことは多くありましたが、職員同士の人間関係が上手くいかずに辛い毎日を過していました。そんな折に、柳城から専攻科の案内が来ました。この案内こそが私にとってもう一度夢を叶えるチャンスを神様が与えてくれたんだと思いました。

専攻科に入り、論文を書き終えた後、初めて協力隊の試験を受けました。結果は、落ちました。結局私は公立の臨時保育士として働きながら試験に臨む日々を迎えることになっ

たのでした。結果的には、ここでの保育所生活が私をさらに成長させてくれることになったのです。私がお世話になった保育所の先生達は保育に対していつも前向きで、妥協をしない。そして何よりも子どもたち以上に毎日の生活を楽しんでいる方達の集まりでした。私はそんな素敵な先生達の保育をできるだけたくさん学ぼうと思いながら日々の生活を送りました。

そして今度こそ受かってみせる!!と思い、2度目の試験に臨みました。しかし結果は…2度目だけでなく3度目の試験にも落ちてしまいました。落ち込んだ私を導いてくれたのは、偶然読んでいた本の中にあった「道がなければ切り拓いていけばいい」という言葉でした。思い起こせば毎日の保育も行き詰まってしまった時は、一緒に組んでいる先生達や自分でその解決策を見い出したり、新しい方法を生みだしたりして道を切り拓いているではないか。そう思った時、私は今までのやり方が駄目なら違う方法を探そうと考えました。今までは過去問題を解いたり、保育のアイデアを取り入れる方法で勉強を進めてきました。しかし4度目の試験に臨む際、私は自分の保育を見つめ直しました。例えば自分の得意分野は何か、苦手な所は何か、そしてそれをどうやって克服しようとしたのか、また自分の保育をする上での信条は何か…等を冷静に考え、書き出してみたのです。(みなさんも就職したら時々でいいので考えてみるといいですよ。)

そして4度目の挑戦で手に入れた合格。その日は保育中だったけれど、一緒に組んでいた先生達が一緒に泣いて喜んで抱きしめてくれました。そしてその日は人生で一番幸せな日となりました。その後、私のパキスタン行きが決まりました。場所はフマックにある子ども福祉モデルセンターといい、60人の子ども達が通う小さな幼稚園。そこで私は少しでも、経験したこと学んだことを活かし、その幼稚園が良い方向に成長できるように努めていきたいです。そして、現場の先生達と一緒に子どもの成長を楽しく見守っていけたらいいなと思っています。

派遣までの間もやらなくてはいけない勉強がたくさんあります。しかし、ここまで来たのだから諦めないで最後までやろうと心に誓い毎日を過ごしています。

自分のやりたいことを見つけてからここまで9年かかりました。私はこの9年間諦めないで本当に良かったと思っています。みなさんも、ぜひ毎日の中でやりたいことを見つけ突き進んでください。それは自分の人生の原動力になるし、励みにもなるからです。そしてたとえ困難に出会っても、自分の力を信じて切り拓いてください。どの道を行くにしても最後まで全力で進んでください。みなさんの夢が叶うように影ながら祈っています。

シスター・エヴリンのこと

中根　淳子

私はカナダ、オンタリオ州のある州立大学の老年学セミナー（2004年より実施）に、主に介護専攻の有志学生と参加していました。例年、歓迎会や施設訪問のお礼に合唱のプレゼントをしていたのですが、昨年は歌の1曲を聖歌「あなたの平和の」にしました。全世界で歌われている聖歌で、故ダイアナ妃の葬儀のときにも使われた曲です。ところが、この聖歌に関する逸話を学生は全く知らない様子なので、私は自分の勘違いかと心配になり、インターネットで調べてみました。

すると「わたしたちを平和の道具に」という思いがけない内容の記事を見つけることができました。神戸聖ミカエル教会牧師のアンデレ中村豊司祭の書いたもので、それによると同教会で開かれた市民クリスマスで、幼稚園の子どもたちが「あなたの平和の」を合唱したそうです。数日後、司祭のところに兵庫

県仁豊野の修道院から一通のクリスマスカードが届きました。そのカードには「…こちらのひとりのsisterが持って帰ったプリントの中の、1.“あなたのへいわの”のpageの下に訳詩者不詳と書いてありましたが…そのセバスチャン・テンプル（作曲の）訳は30年くらい前に、前賢明女子学院の生徒たちのためにわたしが訳したものです。まだ生きておりますので、お知らせいたしたいと思いました。よく歌ってくださってうれしいです。」
というメッセージが添えられていたそうです。カードの送り主は「あなたの平和の」を和訳したシスター・エヴリン・ウェストマンでした。記事によるとシスターはカナダ出身で、日本滞在は53年に及び、姫路の賢明女学院で音楽の先生をしていたそうです。戦後の混乱した時期の日本で長年教育や伝道活動に尽くされたことなどは、柳城の創始者ヤング先生の働きにとてもよく似ているように思いました。

私は急にこのシスターに会いたくなりました。会いたいというよりも会わなければいけないような衝動に駆られました。さっそく電話をしてみると、なんと、シスターウェストマンは心臓の病気で数日前に入院されたとのことでした。たいへん驚きショックでしたが、その後、奇跡的に回復しお元気になられたシスターと電話でお話しすることができ、この話をとても喜んでくれた尾上先生と２人で仁豊野に行きました。2003年５月２日、金曜日のことです。

中根先生（左）とシスター・ウェストマン（右）

シスターのお話では入院された時は意識不明で重態だったそうですが、お会いすると、大病の後とも83歳とも思えない若々しさが感じられました。50年以上前に日本に来るにはモントリオールからサンフランシスコまで汽車で４日。シスターはそこで何日も船を待って、さらに２週間かかって横浜に入港したそうです。ちょうど梅雨の時期で、小田原ではがけ崩れがあって足止めされるなど今では考えられない苦労をされたようです。その他、姫路に来て賢明女学院の学生たちとミュージカルを上演したことや、多くの聖歌を和訳したことなどたくさんのお話をしてくださいました。戦後の、どこにあるのか、またどんな国なのかもよくわからない日本に来ることを決心した理由を尋ねると「主が私にそうするように言ったからです」と当然のようにおっしゃいました。尾上先生も私も胸がいっぱいになりました。そのあと、シスターは歌を歌うと息切れがするようでしたが、“Come fill my world”という歌を美しく温かみのあるソプラノで歌ってくださいました。

シスターは2003年６月８日に日本でのすべての仕事を終えてカナダに帰国されましたが、その直前に新しい日本のお友達ができたと私たちの訪問を心から喜んでくださいました。帰国後はすべてがフランス語という環境の中で、日本をとても懐かしんでいらっしゃるご様子でした。昨年６月25日に柳城の学校礼拝で、シスターの紹介とともに市原先生の協力を得て「あなたの平和の」と“Come fill my world”を皆で歌ったことをメールで報告すると、ことのほか喜んでくださいました。

本学の「さんびか集」も「あなたの平和の」の訳詩者は不詳となっていますが、シスターのことを森主教に報告したところ訳詩者として認めてくださいましたので、次の讃美歌集にはきっとシスターの名前が載ることでしょう。そうしたら私はそれをカナダに送ります。シスターウェストマンのことを敬愛していたあるシスターがそれをきっとお墓に持って

行って見せてくださると思います。

シスターは帰国後しばらくして体調を崩され、今年３月11日、神様のもとに帰られ、今はSherbrookeにある修道院のお墓に眠っています。

新任チャプレン紹介

本年４月から、前任の菅原裕治チャプレンに代わり、市原信太郎チャプレンが着任されました。ここでは、ご本人にざっくばらんに自己紹介をしていただきます。

（インタビュー：「ちゃぺるにゅーす」編集部）

編集部（以下「編」） まず出身地をお伺いします。

市原チャプレン（以下「チ」） これがね、結構難しいんですよ、わたしの場合。人には一応「東京出身」と言ってますが、正確に言うと「九州生まれ、仙台経由、東京行き」です。九州出身という気持ちが自分のどこかにはあるのですが、３歳までしかいませんでしたからほとんど記憶はありません。仙台にも６歳の１月までででしたので、幼稚園は卒園できませんでした。「幼稚園中退」ってことかな。小学校から大学を出るまでは東京ですが、でも小学校の途中で宮崎に行ってたこともあるしなあ…大学を出て就職してからは長野県塩尻市に10年住んでました。それから一念発起して神学校に行った時には東京でしたが、２年後には留学してアメリカに１年住みました。ま、まとめると「住めば都」を地でいった人生ということになるでしょうか。

編 牧師になるきっかけって何だったんですか。

チ まず、その「牧師」ってとこを説明しなきゃいけませんね。わたしは聖公会の「聖職」ですが、教会内の立場としては「執事」といいます。教会のことだけでなく、教会と世界との間に立って奉仕するのが任務と言われています。その他、聖公会は「主教」と「司祭」という職制を持っていて、森理事長は中部教区の主教です。で、教会で働く司祭のことを牧師と言い、学校や病院などのチャペルで働く聖職者をチャプレンと言うんです。「チャプ」と「チャペ」と似てるでしょ？

編 はあ、なるほど…

チ で、さっきのご質問にお答えすると、わたしはもともと大学では機械工学を専攻したんです。でも全然学校の勉強が面白くなくって、コンピュータばかりいじっているうちにこの道で食っていこうと思って、コンピュータ関連の会社に入りました。そこでソフトウェアの設計とか、商品企画とか、いろんな仕事をさせてもらいました。仕事は楽しかったんでやめたくはなかったんですが、でも「自分の一生の仕事って何だろう」と考えたときに、人を励ます仕事をしたいなと思ったんです。それが一つのきっかけです。

編 柳城の印象ってどうですか。

チ 名古屋に来る前から、教会関係に柳城出身者はとても多いので、いろんなイメージを持っていました。聖職のお連れ合いで柳城出身の人は多いんですよ。昔は特に小人数で、塾のような学校だったと聞かされていましたが、それよりずいぶん大きいなあとは思います。でもこのアットホームな感じは好きですし、大切にしたいと思っています。何とか、学生の皆さんの顔と名前が一致するようにと頑張っています。どうぞ気楽に研究室を訪ねてください。いつでもお茶くらい入れますから。あ、もう一つ。礼拝の時間、ぜひチャペルにも来てくださいね。お待ちしてます。

キリスト教Q＆A

名古屋聖ヨハネ教会勤務
聖職候補生　ヨセフ
下原　大介

Q1.　洗礼名（クリスチャンネーム）って何ですか？

A1.　キリスト教の信仰を公に告白して、洗礼式（聖公会では聖洗式と言います）という新たなキリスト教の信徒として教会に受け入れられるための儀式を受けた人々に授けられるキリスト教の信徒としての名前のことです。キリスト教の信徒として、改めて生き始めるという"新しい命"、"新しい名前"の象徴というものが洗礼名です。

しかし、この洗礼名を授ける伝統はすべての教会にあるというものではなく、ローマ・カトリック教会、聖公会、東方教会などの教派に属する教会が保持してきている伝統です。

この洗礼名は、"クリスチャンネーム"と呼ばれることがよくありますが、他に"教名"、"霊名"と呼ばれることもあります。この呼び方には、洗礼を受けた人のこれからの人生に大きな影響を与える名前であるという理解が込められています。

Q2.　洗礼名には、どのような名前を付けるのですか？

A2.　一般的には、聖書に登場してくる人物やキリスト教に関わりのある歴史上の人物、そして守護聖人の名前などです。しかし、なかには愛・望み・恵み・知恵などの信仰上の徳を意味する言葉を付ける人もいます。

■聖書に登場する人物…例えば、ヨハネ、パウロ、ペテロ、マリア、ルツ

■キリスト教に関わりのある歴史上の人物・守護聖人…例えば、アウグスティヌス、フランシスコ

■信仰上の徳を意味する言葉…例えば、ソフィア、グレース

Q3.　洗礼名は、どうやって決められるのですか？

A3.　洗礼名が決められるケースは大きく分けて二つあります。

一つ目のケースは、生まれてすぐに洗礼を受け、洗礼名を授けられるという幼児洗礼による洗礼のケースです。この場合、洗礼を受けた当人はまだ幼児ですから、自分で洗礼名を選択することはできません。ですから、この場合は洗礼を施した司祭か両親の選択によって洗礼名が決められることになります。親が、新しく生まれた子どもに名前を付けるのと同じ感覚です。

もう一つのケースはキリスト教国ではない国に多いケースで、自らの意思でキリスト教を信仰し、教会の信徒となることを決断し、洗礼を受けたケースです。この場合、自分の好きな洗礼名を自分で選択することができます。そのため、アマデウスと付ける音楽好きの人や、ジャンヌ・ダルクと付けるロマンティストなど、色々な人がいます。

ちなみに、柳城学院の理事長である森紀旦主教の洗礼名は、自然と動物をこよなく愛し、小鳥などにも説教できたという聖人、フランシスコです。また柳城短期大学チャプレンの市原信太郎執事の洗礼名は、エルサレムの王として神に愛され続けた竪琴の名手、ダビデです。

もし皆さんがクリスチャンになるとしたら、どんなクリスチャンネームを付けますか？これを機会に聖書を開いてみてはいかがでしょうか。

＜お話の種＞

世界的に有名な画家であるパブロ・ルイス・ピカソ、彼にも洗礼名があります。その洗礼名を加えると、ピカソの正式の名は"パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・シプリアーノ・クリスピン・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダッド・ルイス・イ・ピカソ"になります。皆さん、覚えられますか？

おしらせ

今年度前期に行われた、チャペル関連の諸行事についてご報告します。

▼４月１日（木）　全学始業礼拝

▼４月14日（水）　全学年合同礼拝

初めての試みとして、学外合同ゼミナールの説明会と合わせて「復活を祝う礼拝」を体育館で行いました。ちょっと変わった趣向の礼拝をしました。

▼４月28日（水）　大西修司祭（名古屋聖マタイ教会牧師）講話

大西先生は付属園の卒業生で、お連れ合いも本学の卒業生であり、現在は本学理事をしてくださっています。そういった、ご自分と柳城との関わりを含めお話くださいました。

▼４月23日（金）～24日（土）　学外合同ゼミナール

合同ゼミでは、初めの礼拝と2日目の朝の礼拝を全員で行いました。ふだんとは雰囲気の違う場所での礼拝でしたが、2日目は眠そうな人が多くて今ひとつ元気がなかったかも？

▼５月12日（水）　墨さおりさん（卒業生）講話

海外青年協力隊員として活動するという長年の夢をかなえられるまでのステップをお話くださいました。詳細は本号３～４ページをご覧ください。

▼５月26日（水）、６月２日（水）　テゼの祈り

保育科２年生の実習中、保育・介護専攻の礼拝を「テゼの祈り」という形式で行いました。希望する1年生にも参加してもらいました。歌と沈黙が中心の静かな時間でした。

▼６月９日（水）　下原太介聖職候補生（名古屋聖マタイ教会勤務）講話

愛についてのお話でした。この日の礼拝には、ふだんよりもずっとたくさんの参加者があったような…

▼６月23日（水）　中野早苗先生（付属柳城幼稚園園長）講話

豊富なご自分の保育体験を中心としたお話に、皆真剣に耳を傾けていました。

▼７月７日（水）　中村雅さん（本学総務課課長）講話

「重」という重度の障害をもった子供との触れあいの経験と、愛に支えられた人と人との触れあいの大切さを語ってくださいました。

▼７月14日（水）　全学合同礼拝：松本普さん（笹島人権センター）講話

松本さんの30年以上にわたる活動の中で、特にホームレスと呼ばれる人々のことをお話くださいました。会場は満席でしたが、全員が真剣に聴き入っていました。（詳しい内容は次号に掲載予定）また、軽音部が最後の聖歌の伴奏をしてくれました。非常にノリのいい一部の会衆からは、かけ声や手拍子なども飛び出しました。

2004年10月１日発行　第９号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷

この印刷物は再生紙を使用しています。